

氏名	孫宇雷 (SUN YULEI)	
学位	博士 (日本語文化学)	
学位記番号	甲第125号	
学位授与年月日	平成27年3月20日	
審査研究科	外国語学研究科	
論文題目	逆接構文における接続機能辞の体系的研究 —「主観性」から見る逆接構文の成立をめぐって—	
論文審査委員	(主査) 大東文化大学准教授	上村圭介
	(副査) 大東文化大学教授	田中 寛
	(副査) 大東文化大学准教授	福盛貴弘
	(副査) 学習院大学教授	前田直子 (外部副査)

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 研究の内容、目的

本研究は逆接構文における接続機能辞を体系的に取り上げ、主観性の視点から逆接の成立の要件を考察し、逆接を成立させる前件と後件の論理的意味関係を明らかにするものである。具体的な研究目的は以下の通りである。

- 1) 逆接の論理の中に潜む意味的な関係の検討
- 2) 逆接構文の接続に見られる機能的成分の体系的分析
- 3) 条件系逆接構文における主観性についての考察
- 4) 事実系逆接構文における主観性についての考察

これらの研究を通じて、現代日本語の逆接構文における条件系逆接構文と、事実系逆接構文の成立、及び構文の特徴を明らかにした。また、条件系逆接機能辞と事実系逆接機能辞の関わり合い、拡張などもネットワークを用いた図式化を試みる。本研究の理論的基盤は以下の通りである。

本研究は主観性という視点から逆接構文を考察した。本研究の定義する「主観性」とは、「自然言語は、その構造と通常の働き方の中に言語行為者による自己ならびに自らの態度・信念の表出に備えているさま」のことを指す（澤田編 2011『主観性と主体性』）。認知言語学では、人間の客観世界への認識は、絶対的な客観のものではなく、人の捉え方によって、意味づけられた概念に過ぎない（河上 1996『認知言語学の基礎』）。「主観性」という概念は、話し手の主観的刻印から、話し手の事態への捉え方まで、広い範囲で捉えられている。本研究では、「主観性」を大きく「話者の捉え方」と、小さく「話者の主観的刻印」に分けて考察する。

「逆接」という定義について、先行研究では、「当然予想される事態の不成立」（渡辺 1971）、「ナチュラルなロジックとのズレ」（西原 1985）、「前件に対して後件が順当でない結果」（加藤 2001）、「何かぶつかるような感じ」（角田 2004）などが挙げられる。これらは、人の〈主観性〉の働きが関係していると考えられる。例えば、「雨が降っている」→「外へ出かけるのが不便だ」には、人間の共通する経験基盤に基づいた判断や推論が働いている。そして、「雨が降っているのに、彼は出かけた」という文には、前件と後件は常識による推論に背反している。本来、「雨が降っている」と「彼は出かけた」という二つの事態に関連性はないが、常識による推論が働き、前件と後件を逆接関係として関連づけているのである。ここでは、「人の捉え方」という主観性が入っていると判断される。

逆接構文では、前件と後件を繋げる接続機能辞が重要な機能を有している。我々は、接続機能辞を見れば、前件と後件の意味関係が読み取ることができる。尾谷（2003）によれば、逆接構文の前件と後件の関係は、因果関係の範疇を超越してはいるが、まだなんらかの関連づけが残っていると示している。尾谷（2003）は、Langcker の参照点モデルを利用して、複文における前件と後件の関連づけを示している。さらに、参照点モデルの複合した形式の Multiple Dominion Model を用いて、因果関係の領域（ID: Immediate Dominion）から離れている結果が、まだ上位概念にある領域（MD: Maximal Dominion）に存在していると示している。この MD は、逆接の前件 R（参照点: Reference Point）と後件 T（ターゲット: Target）の共同領域である。尾谷（2003）によれば、逆接構文において、前件 R と後件 T は MD という共同領域によってつながっていて、個々の接続機能辞には固有している MD（想起関係）があるという。しかしながら、個々の接続機能辞における MD とは何かについて明らかにされていない。したがって、このことについてはまだ研究する余地があると考えられる。本研究は、逆接構文における接続機能辞を対象に、前件 R と後件 T の関係を考察し、各逆接機能辞の MD を明らかにする。また、前田（2009）の意味的、記述文法的に整理した逆接表現に、尾谷の認知言語学のモデルを援用して、逆接の成立を考察し、逆接機能辞の体系化を試みる。

3. 論文の構成、内容

本論文は序章、終章をふくめ、全6章からなり、全228頁にわたる。以下、各章を要約する。序章では本研究の目的、方法、課題について述べた。

第1章では、逆接構文に関する先行研究を概観した。逆接構文の従来の記述的研究を表にして要約を試みた。次に、本研究の理論モデルや関連概念を説明し、そして応用例を挙げながら、認知言語学における理論モデルが逆接構文に適用できる妥当性に言及した。第2章、第3章は構文分析である。まず第2章は「テモ」系構文（条件系逆接構文）では、とりたての「モ」の用法からの拡張が観察される。とりたての「モ」の〈同類の提示〉（「暗示する」という説もある）がプロトタイプ的な機能であると考えられている。ある事柄 R をとりたて、その R の背景にある同類の ID（集合とも理解）が暗示されている。つまり、R と共通性のあるものは幾つか同類の ID を構成している。異なる ID のメンバーが集合されると、〈意外〉のニュアンスも読み取れる。このように、とりたての「モ」には、プロトタイプ的な用法から周辺の用法への拡張が観察される。逆接を表す「モ」も、〈意外〉という用法の拡張と見なせる。同類を示す「モ」と類似して、「テモ」文では、条件付けの唯一性が否定される。つまり、同じ結果を導く条件が「テモ」文によって取り立てられている。また、この「結果」も条件依存の結果と非条件依存の結果に分かれる。非条件依存の場合、結果は変わらない状態を示している。つまり条件を経由しても経由しなくても、結果の成立には変わらない。例えば、「普段別に何も感じてないが、検診の結果を見テモやはり異常なし」にみられる「異常なし」は、そのまま変わらない状態を示している。条件依存の場合では、「ここを押したら、スイッチが入る。ここを押してモ、スイッチが入る」のように、「スイッチ」が入る条件として、「タラ」文の「ここを押す」と「テモ」文の「ここを押す」を経由しないと、結果が達成できないということがわかる。

以上のように、同じ結果を導く条件の ID の拡張が観察される。また、条件にもいくつか種類があり、そのうち、「逆条件」は、「テモ」文で最も頻繁に見られる特徴だといえる。この「逆」の条件からも、順接条件の結果を導くことから、条件の ID の極端的な拡張が観察される。さらに、「テモ」文も、「モ」文と類似し、同類を並列して示すことができる。具体的には、〈反復用法〉が挙げられ、〈同語反復〉や〈例示反復〉、さらに〈肯定・否定の反復〉へと分類できる。また、反復用法を分けて使う場合、前田の言う〈並列逆条件〉文が得られる。例えば、「結婚したら、悔恨あり。結婚しなくテモ、悔恨あり」。「結婚」してもしなくても、「悔恨ある」という結果に導かれることが必然的だと思われる。したがって、肯定・否定、あるいは〈正・反条件〉で現れる場合、「テモ」文は一種の〈無条件〉と類似し、条件の ID が無限に拡張されるように見られる。また、第 2 章の「テモ」系構文の研究で、「テモ」の関連形式「スル」+「テモ」、「トイウ」+「テモ」、「トモ・ドモ」も分析した。「スル」+「テモ」は、「トシテモ」「ニシテモ」の形となる。「スル」+「テモ」の場合では、仮説の場合が多く、前件条件の変換を仮定し、それでも今既に成立している結果は、影響を受けずに成立するということが判明できる。さらに、「トシテモ」文では、条件の変換形式が多くあげられるが、「ニシテモ」の場合では、前件認識の再注釈、後件の恒常性を示すのが特徴である。「テモ」の関連形式には、「トイウ」+「テモ」系列もある。具体的には、「トハイッテモ」「トハイエ」「カラトイッテ」がある。これらには、前件引用の機能が強く観察され、言い方の不適格さ、不十分さや矛盾する側面を示す、言い訳の不適格さを示す機能が果たされる。前件と比べると、後件は常に、一般性や恒常性を示している。これは、副助詞の「モ」の程度量型に共通する用法である。例えば「東京モ西の外れ」という例文は、「東京トイッテモ西の外れ」と言い換えられる。さらに「トモ・ドモ」では、関連形式の「Vウ・ヨウト(モ) /デアロウト(モ)」「Vウ・ヨウガ(デアロウガ)」、「デアレ」の考察を行った。「トモ・ドモ」系列は、反復の「テモ」と共通し、反復例示の機能が強く観察される。また、逆条件の例示もあげられる。逆条件の場合では、前件から影響を受けずに後件が成立すると理解できるが、逆条件でない場合、肯否反復、例示反復は、無条件や順接条件と類似し、ただ同じ結果を導くことを示している特徴が観察される。以上のように、「テモ」文では、前件をいかに変化させても(たとえ逆接のような、常識による推論に反しても)後件が変わらないという特徴とともに、後件の成立にあつては(注釈系を含め)、一般性、恒常性を示していることがわかった。

第 3 章は「ノニ」系構文(事実系逆接構文)の前件と後件の意味的特徴について分析した。「ノニ」系では、一般的に前件・後件共に事実である傾向がみられる。「ノニ」文の前件と後件は、常識による推論や、個人的期待と食い違い、背反関係となっている。つまり、「ノニ」系構文では、逆接は、常識による推論や個人の期待との食い違いから生じている。また、「クセニ」文では、前件と後件の不一致が常に観察される。話者の論理から、前件と後件が一致しないと、違和感が生じることが、「クセニ」文から読みとれる。また、前件と後件の不一致は、人による不一致が多い。「クセニ」文では、この不一致に対して、関連する対象への非難が観察される。さらに共存の逆接「ナガラ(モ)」「ツツ(モ)」、再吟味や非難の「モノノ」「モノヲ」、切り替えや変化を示す「ノヲ」「ノガ」、既定価値を崩す「トコロ節」、より客観的な視座を有する「ニモカカワラズ」文を考察した。「モノノ」文では、前件を再吟味する点で、後件で前件とふさわしくない部分が示されている。後件で前件の程度・進度、ポイントを示す機能がある。「モノヲ」「ノヲ」は、前件そのものが反事実仮想となれる点で共通している。また、「ノヲ」には、推論を介さない(場面の切り替え)も表せる。「ノガ」「ハズガ」には、前件と後件が事態の変化を示すのが特徴である。さらに「トコロ」節においては、場面を共感する機能が特徴だと考えられる。その場面を示し、前件の既定価値を崩す過程が観察される。「トコロデ」文とは異なり、「トコロガ」文では、前件から期待が含意される場合がある。したがって、「トコロガ」文は、反期待も表せる。「トコロヲ」はただ、事態発生の軌道変換と考えられ、この点では、「ノニ」文の不本意という用法と共通している。最後に「ニモカカワラズ」文も考察した。前件と後件は常識による推論や第三者の期待に反しているが、話者はより客観的な視座を取っていることから、主観性が伺えないということがわかる。

第 4 章では、「テモ」系構文と「ノニ」系構文の全体像を考察し、逆接の成立および逆接機能辞を体系的にまとめた。「モ」から「テモ」への拡張、さらに、「テモ」から注釈系、並列系、及び条件の変化を体系図で示した。「ノニ」系構文においては、「ノニ」と「クセニ」の生成の比較、さらに「ノニ」系諸構文の関連性を体系図で示した。終章では、結論と今後の課題を述べた。

4. 研究の成果と意義

本研究は逆接構文を成立させる要件として従属節に見られる接続機能辞の多様性に着目し、こ

れを条件系と事実系に二大別し、具体的には「テモ」構文の基幹とその派生の態様、また「ノニ」構文の基幹とその派生・周辺の態様を具に考察し、それぞれの用法の特質と拡張する様相を比較検討した。研究手法としては「主観性」に着目し、この生成概念ないし意図が構文にどのように反映されているのか、構文レベルにおける特徴を主たる対象として研究を進めた。その手法のひとつは認知言語学的手法である。また、多くの言語データを収集、抽出するにあたっては各種の膨大なコーパスを使用し、計量的な考察を通じて特徴の解明につとめた。この大きな柱は複文研究にとって大きな前進となるもので、体系化の指向性をよく表わしている。

本研究を通して主として次の諸点が明らかにされた。

逆接の成立には、以下のような類型があることが明らかにされた。(1) 直接対立：RとTは、肯定・否定の対となっている。あるいは、RとTは語義の面で対立している。(2) 領域の対立：RとTはそれぞれ、異なるIDに属している。Rが入っているID1とTが入っているID2は、対立関係となっている。例えば、プラス評価とマイナス評価の対立が挙げられる。(3) 心の世界と現実世界の対立：ID1は心の世界で、ID2は現実の世界である。RはID1に入っていて、TはID2に入っている。RとTが一致しないと、前後件が逆接関係を成す。

以上、逆接構文の認知的な把握による二大別にはまだ修正すべき点もあるが、主観性を軸に複文の従属節と主節の意味的関係性を追究した成果として高く評価される。

5. 審査会における意見

本研究は複文のなかでもさまざまな類型を有する逆接構文の大きな柱を「仮定系」と「事実系」にわけて、それらの派生形、拡張形式について詳細に研究した。「事実系」はむしろ「事態系」としたほうが分かりやすいが、この二大別は人間の認知的な事態把握に大きく関わっている。従来の記述的研究を補完する、あるいは発展する研究手法として「主観性」を基軸に論証を試みた点は本研究の独創的な面を表わしている。副査である田中寛指導教授からは多岐にわたる逆接構文の類型化、体系化を目指した研究と位置づけ、意外性、主張の表出性などを明らかにした点を評価した。その一方で「(だ)が」「けれど(も)」類をも含めた発展性にも言及した。また逆接の形式をもちつつも「コーチにしたところで」と「今から出かけるにしたところで」などの「トコロデ」構文は見せかけの逆接ともいえるべきもので主題提示の機能も見られ、この点についての言及があった。主観性の領域とも関わる今後の課題であろう。外部副査の前田直子教授は本研究の特徴を記述的研究、認知言語学的研究、計量言語学的方法を駆使した点がきわだっており、今後の逆接構文研究に大きく貢献する成果であるとの評価がなされた。また、尾谷理論を逆接構文に援用した独創性についても、今後の従属節と主節の意味関係を分析する新たな視点として評価された。副査の福盛貴弘准教授は言語学の立場から用例の適確性について数箇所の指摘があったが、同時に構文レベルでの考察から談話レベルでの考察への今後の可能性を示唆するものである。主査の上村圭介准教授は日本語教育学、日本語学の立場から、実際の教学に従事しながら具体的な構文分析を行い、教授の実際にも有益な観点をもたらしている点が評価された。その一方で第一章の研究方法で挙げた「主観性」の理論ないし枠組みが一貫した論証の手続きにいたっていない印象が述べられたが、さらに主観性、文の姿勢さらには陳述との相関において複文研究と主観性という大きな課題が浮かび上がってくる。以上のように本研究は逆接構文を対象に、多くの構文形式にも目をくばり、体系化をめざした重厚な研究であることには異論がない。所定の後期課程在籍期間においてこれだけの研究をまとめた力量は大いに評価されてよいし、今後の他の複文研究にも発展の可能性を秘めている。

審査は2015年1月29日、大東文化会館にて行われ、各委員の意見整理は主査上村圭介准教授がおこない、田中寛指導教授、内部副査、外部副査の確認を経て、ここに上程するものである。

結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（日本語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。（平成27年2月19日）

以上

添付資料：孫宇雷氏学術業績一覧(2012.4-2014.10)

学術論文（査読あり）(*)はとくに外部査読雑誌掲載。		
2012	12.21	「複合辞による逆接関係の中国語解釈への再検討」《中日文化比較研究論集》第三輯 pp.306-324 东北大学出版社(*)
2013	2.28	「逆接条件文における主観性について－「ニモカカワラズ」を中心に－」『語学教育研究論叢』30号 pp.93-106 大東文化大学語学教育研究所
2013	3.15	「逆接条件文における主観性について－「ノニ」をめぐる－」『外国語学研究』14号 pp.203-209 大東文化大学外国語学研究科
2013	5.31	「日中同形語の概観と誤用調査のアプローチ」《大学外语研究文集》14号 pp.342-350 长春出版社(*)
2014	2.28	「逆接構文における主観性についての一考察－「トコロデ」「トコロヲ」「トコロガ」の場合－」『語学教育研究論叢』31号 pp.141-155 大東文化大学語学教育研究所
2014	2.21	「逆接を表す「モ」の構文特徴と意味分析－ほかの逆接機能辞との対照を兼ねて－」《中日韩朝比较文化论丛》第三輯(上) pp.237-246 延边大学出版社(*)
2014	3.15	「逆接構文における主観性の研究－「モノノ」「モノヲ」「ノヲ」「ノガ」の場合－」『外国語学研究』15号 pp.183-190 大東文化大学外国語学研究科
2014	5.31	「逆接を表す「モ」の機能分析－典型的な「モ」の用法との連続性をめぐって－」《大学外语研究文集》15号 pp.406-416 长春出版社(*)
国内外の関連学会および外部研究会などでの発表		
2012	6. 23	改正や変更につわる日中同形語の対照研究－「変名」「変名」「改称」「改称」「改姓」「改姓」「改名」「改名」を中心に－ 日中対照言語学会 東洋大学浦水会館
2012	7. 21	逆接関係を担う複合辞の中国語訳について－主観性へのアプローチ－ 日中対照言語学会 東洋大学浦水会館
2012	8.31	逆接複合辞在中日文学作品対訳語料庫中的表达研究 辽宁省外国文学学会 中国・大連外国語大学
2012	9. 7	複合辞による逆接関係の中国語解釈への再検討－「クセニ」「ニモカカワラズ」「トイッテモ」「モノノ」を中心に－ 第三回中日文化比較研究国際シンポジウム 中国・東北大学
2012	10.26	「改正」や「変更」につわる日中同形語表現の対照研究 第三回「東西文化の融合」国際シンポジウム 大東文化大学
2012	11. 4	「改正」や「変更」につわる日中同形語表現の対照研究－「名前を改める」意味カテゴリーの類義語コロケーションを中心に－ 日本語学会秋季大会 富山大学
2013	1. 19	類義語コロケーションから見る日中同形語表現の対照分析－「改正」「改訂」「改定」「変更」を中心に－ 日中対照言語学会 大東文化会館
2013.	1.26	類義語コロケーションから見る日中同形語表現の対照分析－「改めて変えること」の意味カテゴリーを中心に－ 関東日本語談話会 学習院女子大学
2013	2. 9	逆接条件文における主観性についての研究－ニモカカワラズを中心に－ 連語論大会 大東文化大学会館
2013	3. 2	<改正>や<変更>につわる日中同形語表現の対照研究－類義語コロケーションの視点から－ 日本語教育学会第10回地区集会 甲南大学
2013	4. 12	コーパス調査による複合辞の記述的分析－「ニモカカワラズ」をめぐる－ 関東日本語談話会チュートリアル講習発表会 学習院大学

2013	7. 20	逆接構文の成立における主観性についての考察—「テモ」系と「ノニ」系の二分類から— 日中対照言語学会 東洋大学浦水会館
2013	8.30	逆態接続在復句系統的再分類 辽宁省外国文学学会 中国・興城
2013	9.12	逆接を表す「モ」の構文特徴と意味分析—ほかの逆接機能辞との対照を兼ねて— 第三回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム 中国・延辺大学
2013	9.29	逆接を表す「モ」の構文特徴と意味機能—典型的な「モ」の用法との連続性をめぐって— 日本語・日本語教育研究会第5回大会 学習院大学
2013	10.10	逆接を表す「モ」の構文特徴と意味分析—ほかの逆接機能辞との対照を兼ねて— 第3回中日韓朝比較文化研究国際シンポジウム 中国・瀋陽航空航天大学
2013	10.27	逆接構文における主観性についての考察指標 第5回「東西文化の交流」国際シンポジウム 大東文化会館